

子どもたちを育てる自然体験

－平成28年度 上田女子短期大学附属幼稚園の自然保育事例から－

水野 美恵

1. はじめに

上田女子短期大学附属幼稚園は、平成28年度長野県ふるさと森林づくり賞、森林環境教育推進の部で、長野県教育委員会賞を受賞した。これは、子どもたちの遊び場である裏山を守り育て、その中で思いっきり自然体験をしてきたこと（平成27年度に「信州型自然保育“やまほいく”認定園」に認定されている）、木と関わり、木で作って楽しむ木育活動に取り組んできたこと、ドングリの苗木を育て、第67回全国植樹祭で植樹をしたことが評価されたものだった。そんな本園における自然保育の特徴と実践のための保育者研修について述べた後、本年の活動事例を整理し、それらの自然体験から子どもたちにどんな力が育まれたのかを考えたい。

2. 当園の自然保育の特徴

当園の自然保育の特徴は3つある。1つ目は「裏山を遊んでいる」ということである。ここであえて「裏山を」と言っているのは、裏山という場所で遊ぶというのではなく、裏山の全ての環境を遊びの対象にして、という意味である。裏山全体を教材と捉えている。2つ目は「木育を楽しんでいる」ということである。木育とは木と触れ合いながら木材の良さを感じる教育のことである。3つ目は「森づくりをしている」ということである。これは前述の2つのことを実現するためだけではなく、少なからず環境づくりにも寄与していると思われる。この3つは園の教育目標である「生き生きしている子ども」「健康な子ども」「心の豊かな子ども」の育成に成果を上げていると思われる。

3. 自然保育の研修

- ①自然保育を行うためには、保育者自身が裏山という環境をよく知ることが不可欠である。そのために裏山のどこでどんな遊びが繰り上げられるのかを保育者にマップに記入してもらい、『裏山のあそびマップ』を作成した。環境をいかに活用したら有効でかつ楽しめるのかという情報を全保育者で共有するようにした。
- ②自然保育を行うためには、保育者自身の自然に対する発見の目、感じる心が必要だと思っている。そのために園長は『豊かな自然環境の中でのびのび育てよう』の冊子を作成した。季節ごとに見たいもの、感じたいものを書き出し、保育者にこれを参考に自然の感覚を磨くように促した。12月の所には、「冬の不思議を探そう」がある。その中には、クリスマス、雪、氷、冬の自然探検などの内容を入れた。レイチェル・カーソンが『センス・オブ・ワンダー』（新潮社、1996年）の中で、『「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない』と論じているように、保育者は自然の基礎知識と好奇心を持ち合わせていなければならないと考える。
- ③平成28年度を前に（3月23日）、信州外あそびネットワーク副代表の鈴木道郎氏による「裏山での自然保育の可能性」の研修を開催した。そのワークショップの内容は、まず机の上にて、現在行っている裏山での遊びと未実施だがやってみたく思っている遊び、リスク回避について考えた。その後現場に行き、保育の可能性を探るというものであった。自然保育を充実させるためには、柔軟な発想が必要であることを確認し合った。



裏山の原っぱ。



うらやまあそびマップ

4. 自然体験の事例

1) 四季の自然物を活かす

原っぱには巨大なクヌギの木がある。クヌギは春は若葉が芽吹き、夏は緑豊かな日陰を作り、鳥やセミが寄る。秋は落ち葉が地面を覆う。冬、葉が落ちた枝々に雪の花が咲く。意図的に配置した原っぱの円いテーブルは、囲むとお互いの顔や自然物を見合える形状になっている。長い丸太は、大勢で並んで座り、保育者の話を聞いたり、上を渡るような遊びを楽しむことができる。園長は、『子どもはもともと育つ力を持っている』『人は体験することで学ぶ』ということを信念にしている。保育者には、子どもが動き出すことを信じて待つという姿勢を望んでいる。



坂のぼり



ターザンブランコ

2) 足の裏で育つ

子どもたちは、足の裏でも四季の変化を感じる。落ち葉の上を歩く時、枯れ葉のサクサク感はアスファルトの道では味わうことができない。足で地面をしっかり押すようにして下る。次第に坂をぶつかったり転んだりしないよう、大勢で駆け降りることができるようになる。また裏山遊びを始めたばかりの年少児は膝や腕をついて登るが、次第に急な坂をロープなしでも登っていけるようになる。裏山にはいろいろな道があるが、子どもの、大人に教えられなくても自分が成長できる道を選んで登っていく姿に感心する。

3) 風を感じる

原っぱのクヌギの木から降りたロープは、ターザンブランコと呼んでいる。腕の力と体の重さで高くこぐことができる。原っぱでの冬のソリ遊びは、山あそびの中で一番スピードを体感できる遊びである。裏山の中では、高さ15m以上もある木々を幹ごと揺らす風の力に圧倒される体験もできる。

4) 自然素材を活かす

いろいろな形や色、大きさがある落ち葉、花、実、枝などは、ままごと遊びに多く使われる。さらさらの土を集め、水を加えて固めて型を抜くアースケーキ作りも恒例になっている。これは砂場の砂とは違うこの地域特有の粘土質という地質を活かした遊びである。



落ち葉の中に何がある？



アースケーキ

5) 木と遊ぶ

当園は、平成25年度より木の良さを感じる「木あそび」に取り組んでいる。まず裏山に出掛けて行き、木を見上げ、その大きさを感じたり、手で触れたり、臭いを嗅いだりと五感で木を感じる。そして1年を通してその木がどんなふうになり、葉を落とすのかを見ていく。木が作る日陰の涼しさを感じ、梢の間に見える空や雲、眩い光を見上げていると、本能的に登ってみたいくなるのだろうか。むき出しになった木の根っこにもよじ登る。木の形からイメージした馬や電車などで、ごっこ遊びを始め、集団遊びに発展していくケースが多い。室内に比べると比較的長い時間集中して遊んでいるように感じる。



アカマツの切り株から出た松の赤ちゃん



木の根っこによじ登る

6)木で作る

かなづち、くぎ、のこぎり等、本物の道具を使って木材を切り、組み合わせて遊ぶ。初めて手にした道具をどう扱ったらくっつけることができるのか、保育者は先に答えを与えず、まず体験させ、自ら気づいていけるように見守るようにする。今年、NHK大河ドラマ「真田丸」の影響で、クラスで城づくりをした。どの材料で、どんな手順で造っていくのかを相談し、試行錯誤を重ねながら作った。出来上がった城は、裏山の中に山城として置き、その脇に六文銭の旗を掲げた。木の枝で陣地を作り、忍者に扮して自由自在に駆け回る姿は、年少、年中から山の中で遊んできた成果である。

7)木の実で遊ぶ

年長児は、ドングリが転がるコース作りをグループごとに行った。釘で長い木片や釘をどのような角度で合板に固定したらドングリが面白く転がっていくのか、何度も試しながら作っていった。ペットボトルにドングリの実を入れて振るマラカスや、小枝で缶を叩く太鼓、並べた石を小枝で擦るような楽器を作る。一つひとつは素朴な音だが、みんなで奏でると原っぱじゅうに賑やかな音が響く。



お城と六文銭



ドングリのコロコロコース

8)ヤマンバの切り株

裏山の頂上に生えていた樹齢200年のアカマツの大木は、地域住民からも大切にされ続けてきたが、1993年(平成5年)にマツクイムシの被害に逢い伐採することになった。その際に、地元のシンガーソングライター黒坂正文(黒太郎)氏は「風になれヤマンバの木」と「ヤマンバの切りかぶの歌」という歌を作られた。今も園児たちに歌い継がれている。この歌詞とメロディーは、裏山を駆け回って遊んだ子ども時代の思い出と共に子どもたちの心に残り続けることだろう。

9) やきいも大会・もちつき大会

畑で作ったサツマイモは、山の木の枝や落ち葉を燃料にして、原っぱの穴で燻になるまで焼く。火の熱さ、煙の臭い、燻の色や、やがて灰になる過程など、日常生活では味わうことのできないものを五感で感じることができる。もちつき大会ではもち米を研ぐ、水に浸す、かまどで蒸かすという工程を見たり、体験したりすることができる。うす、きね、かまど、おかまという道具にも触れられる。今の世の中では、食べ物コンビニで簡単に手に入れたり、短時間で調理できるようになった。やきいも大会やもちつき大会のように、大勢で手間暇をかけて(保護者の手伝いもあり)準備や調理をし、寒い季節に自然の中で身を寄せ合って食べる機会は貴重である。それは子どもだけではなく、保護者にとっても貴重な体験になる。この時初めてきなこやあんこを食べる子どももいる。自然に関することは食育に結びついている。灰は畑に入れて肥やしにする。感謝して自然に帰すのである。

10) 森を歩く

裏山は地域の親子にも開放する。親子で歩くことで、親は子の体力と気力の成長を確認することができる。子どもは広い空間でのびのびと遊び、親も自然に癒されてリラックスすることができる。木の実や小枝を拾い、透明なケースに入れて小さな森を作ったり、きのこたっぷりの熱いスープをテーブルを囲んで食べたりする。たまたまその日偶然出逢った親子に笑いと会話が生まれる。

11) 森づくり

年長兄は、年少の時に山で拾ったドングリの実をポットに埋めて苗木を育てた。春、芽を伸ばした苗木は、水をもらってグングン伸びたが、夏には枯れそうになった。そこで林務課の方に支援を求め、再び裏山へ行き、実生の苗木を掘り出して育て直すことにした。

平成28年6月、第67回全国植樹祭が開催された。年長まつ組は、裏山の続きの下之郷東山で自分たちが育てた小さな苗木が大きな森になることを夢見て植樹を行った。幼稚園の裏山は手入れが欠かせない。毎年、林業士さんに森林計画を立ててもらい、枯れた木は伐採し、森林に光を入れて樹木を育てるようにしている。このような森林保全にかかる費用の捻出が当園の課題になっている。



育てたドングリの苗木



第 67 回全国植樹祭



落ち葉のプール



長野県ふるさと森林づくり賞

5. おわりに

子どもたちは自然の中で身体と心を開放した。安心して自分を出していけるようになった。自分の育つ力を発揮できるようになり、いろいろな力が伸びてきた。このような自然体験でどんな力が育ったのか？一言で言うと、『主体的に遊び込む力が育った』と言える。主体的に遊ぶ力は学ぶ力である。具体的に、育ったと感じられる力を保育者たちに聞いてみた。創造力・想像力・発想力・運動能力・自己コントロール能力・コミュニケーション能力・好奇心・知・技・集中力・感覚能力・探究心・など数えきれない。自然環境は子どもの成長にはなくてはならないものである。しかし、野外で活動しさえすればよいというものではない。自然体験の中で、子どもの何が育っているのかを見極めることが重要である。人も自然の一部。自然の中で人間の本能は目覚め、力が発揮されていくことだろう。感性が豊かになれば更にいろいろなものが見え、感じられるようになるはずである。お互いに心に余裕が持てるようになれば、豊かな子育てができるようになると思われる。今後も、保護者、短大、短大生、地域の方々と連携し、共に育ち合う自然体験を重ねていきたい。

最後に、ご協力いただいた全ての方々に感謝いたします。ありがとうございました。